第１２期東京都生涯学習審議会
第６回全体会

会議録

令和４年６月２９日（水）
午後６時００分から午後８時０６分まで
都庁第二本庁舎３１階　特別会議室２２

○出席委員

笹井 宏益　会長

志々田 まなみ　副会長

海老原 周子　委員

澤岡 詩野　委員

竹田 和広　委員

福本 みちよ　委員

松山 亜紀　委員

横田 美保　委員

第１２期東京都生涯学習審議会　第６回全体会
会議次第

１　開会

２　議事

各委員からの「検討枠組み」を受けた提案

（１）澤岡詩野委員

（２）海老原周子委員

３　今後の予定

４　閉会

【配付資料】

資料　第１２期東京都生涯学習審議会　第６回全体会　審議資料

報告資料　「ご近所ラボ@都立高校～多世代が知りあい、地域を学ぶ～」（澤岡委員）

報告資料　「都立学校（高校）と連携・協働した青少年の育成―都立学校施設等の効果的活用の在り方―（仮題）」（海老原委員）

第１２期東京都生涯学習審議会第６回全体会

令和４年６月２９日（水）

開会：午後６時００分

【生涯学習課長】　　それでは、定刻になりましたので、ただいまから第１２期東京都生涯学習審議会第６回全体会を開催させていただきます。

本日は、野口委員、それから広石委員から御欠席の御連絡を頂いております。また、海老原委員は１９時に到着予定となっております。

早速ですが、資料の確認をさせていただきます。資料は、いつものとおりパワーポイントの「第１２期東京都生涯学習審議会　第６回全体会　審議資料」及び澤岡委員報告資料、海老原委員報告資料であります。タブレットを通じて御覧いただきますよう、よろしくお願いいたします。

本日、傍聴希望者についてはございませんでした。

それでは、これから笹井会長に進行をお願いしたいと思います。会長、よろしくお願いいたします。

【笹井会長】　　皆さん、こんにちは。相変わらずの猛暑で、ここまで来ていただくのも大変だったのではないかと思いますが、本当に御協力に感謝申し上げます。

今日ですけれども、第５回審議会で設定しました都立学校開放事業の検討枠組みというのがありますが、それを踏まえて委員の方々の専門分野から施策や方向性の御提案を頂きたいというふうに思っております。実のところ、前回もそうでしたし、前々回もそうでした。今回もそういうことでお願いをしたいと考えております。

それでは、まず事務局から資料の説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【主任社会教育主事】　　今日はそんなに説明することはないのですが、本日も前回に引き続いて、各委員のほうから、先ほど会長の御説明にもありましたとおり、検討枠組みを一応出したので、具体的にこんなことをやってみたらこれからの社会を活性化する意味でいいのではないかという御提案をそれぞれの立場から頂くことをお願いした第２回目にな

ります。本日は、高齢者の社会参加という観点から澤岡委員に、外国にルーツを持つ方たち、主に学齢の生徒たちの支援という観点から海老原委員に御報告を頂きたいと考えております。

以上でございます。

【笹井会長】　　ありがとうございました。

資料のほうはタブレットのこの中にあるということなので、適宜これをスクロールしながら説明をしていただきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

そういうことで、本日は澤岡委員と海老原委員のお二人から御提案を頂きたいというふうに考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。初めに澤岡委員から御報告、御提案をお願いして、その後で海老原委員からと思っております。当初の予定では、澤岡委員からお話しして、少し質疑応答させてもらって、その後で海老原委員からも同じようにする。全部まとめて、ある意味ではいろいろな形で総合的に御議論をと思ったのですが、海老原委員が少し遅れていることもあって、前半部分を澤岡委員への質疑応答、それから議論、その後で海老原委員の御報告と質疑応答、議論というふうにしたいと思いますので、御了解いただければと思います。

それでは、澤岡委員から御報告をお願いしたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【澤岡委員】　　皆さん、こんばんは。私のダイヤ高齢社会研究財団という三菱系の研究機関は、超高齢社会のコミュニティや社会の在り方みたいなことを大きなテーマで研究している財団なのですが、その中で特に私は地域――地域というのはどう定義するかが難しい言葉ではありますが、地面がつながっているところのコミュニティという部分で、どんな人のつながり、どんな活動の場や居場所があれば人は豊かに年を重ねていけるのかということを大きなテーマで研究している研究者になります。その中でも、今日もこの中でお話をさせていただくのですが、自分自身の違和感として、自分が小さい頃から、「みんなでこれをやろう」、「仲良くなろう」と言われると同調圧力に感じてしまって、そういう集団になじめないような子だった経験もあります。あと、親が、「自由でいいじゃないか、学校だって行かなくていいわよ」みたいな、今で言えば割と普通になりつつありますが、その頃だと結構珍しい親に育てられたところもありまして、地域、地面がつながったコミュニティという部分をそういう視点で見ていくと、すごく密度が濃い、「みんなこうやってつながろうぜ」という一斉号令の中で、よく見ると、私のようにそこに居心地の悪さを

感じている高齢世代の方もいるのかな。そんなところで程良い距離感や緩やかさという部分でつながりや居場所という種をまいていかないと、地域に担い手が来ない、地域になじまない人がいる、あの人は問題だ、ではないのじゃないか。これだけＳＤＧｓ、多様性と言われながら、地域というコミュニティの中ではあまりそれが許されないというのはどういうことか。今までなかった緩やかな部分――でも、緩やかというのは結構難しくて、つくり込もうとすればするほど緩やかでなくなるところもありまして、地域の中でそういう場、つながりという部分、関わり方を模索しているのが今の私になります。いわゆる高齢社会や老年学が専門分野で、社会参加の研究をしている先生もたくさんいます。それから地域づくりですが、その中でも少し私は亜流だと思ってお話を聞いていただけたらと思います。

そもそも最近こんな質問をお伺いすることが増えています。「地域にコミュニティが存在する意味って何なのだろう」、「地域がつながらなければいけないってどういうこと？」。震災などがありますと、その後は絆や助け合いましょうという言葉が皆さんにすごく刺さる部分にはなってくるのですが、我々、残念なことに喉元過ぎれば熱さを忘れるということで、今は学生さんに教えていても、「地域って？」、「何でつながらなきゃいけないんですか」。これを若い人が聞くなら分かるのですけれども、シニア世代の中でも、地域デビュー講座などをお手伝いさせていただくと、真顔で、「でもね、そもそも御近所付き合いって何のためにあるんですか。必要なんですか」、「地域に参加するって？」、「自分は外のＮＰＯとかいろいろ手伝っているし、地面がつながったところに関わる意味って何ですかね」と聞かれることも増えています。

そんな中で、「でもね」というところになります。今、人生１００年という言葉。１００歳までみんなが生きるかどうか分かりません。でも、例えば亡くなる年齢の最頻値を見ていくと、やはり女性は９０代にどんどんシフトしていって、女性の半数は９０歳までは生きることがいろいろなデータでも言われています。これは、親世代、それから何かお手本があるかと言われれば、急に延びた、目の前に突き付けられた人生の長さに、「自分らしく」、「豊かに」などきらきらワードを言われてしまうと、もうどうしていいのか分からないシニア世代の方が結構いらっしゃる。１０代は１０代で大変。でも、１００歳は１００歳なりに生き方に迷って結構大変な方がいらっしゃる。その一方で気を付けなければというところは、テレビなどを見ていますと、百何歳で何をやっている人みたいなきらきらシニアや、きらきらした人たちばかりがクローズアップされ、アクティブシニア、生涯現

役という言葉が言われている中で、「自分は駄目なのかな」という部分、自分のアイデンティティを見失ってしまう方々も出てきています。その方々にとって、いかにこれからを生きるかというのはしっかりと学び直しをしなければ見えてこない部分の課題もあると思います。

その中で、体や心の健康、お金という部分は大事な柱ではあるのですが、例えば貯蓄２，０００万円を持っていないとどうのと。あのときシニア世代の皆さんがおっしゃったのは、「今から２，０００万円と言われて、宝くじにでも当たらない限りどうしろっていうんだ」。体や心も気を付けるにこしたことはない。未病、予防もありますが、不摂生の塊だったおじいちゃまが９０代でも元気。でも、毎日節制して節制して６０代でぽっくり逝ってしまう方もいらっしゃる。高齢の方々とお会いしていると、体や心の健康はなかなか思うようにならない。でも、皆さん共通の願いで言えば、「人の世話にはなりたくない」、「健康長寿でいたい」というお話が出てきます。更に言えば、年を重ねれば重ねるほどに、それなりに皆さん、気力、体力が――衰えるという言葉はあまり好きではないのですが、思うに任せないところが出てくる。つながりも減っていきます。その中で自分の生き方を問われたときに、どんどん弱っていく人に対して、「あなたはどう生きたいの？」、「これからの人生、自己責任ですよ」。これはすごく酷なことで、自分に照らし合わせても自分だったら閉じ籠もってしまうかなと思うところもあります。

では、皆さんの共通の願い、健康長寿でいるためにもう一つ、知識や経験。シニアの方々はここが選択肢です。内閣府の調査などいろいろ関わっているのですが、ここは丸を付ける方がすごい部分です。それまで培ってきた長い人生の知識や経験を生かしたい。「生きがい？要らないよ」などと言う人はなかなか出会いません。生きがいを持ち続けることが健康長寿の一つの秘訣というエビデンスも出ていたりで、介護予防、認知症予防にもなる。では、みんな生きがいね。知識、経験を生かしていろいろ活躍すればいいじゃない。「でも」なんです。みんながそうしたいわけでも、みんながそうできるわけでもない。それから、ステレオタイプで言われている世代間交流に顔を出しているシニアみたいにみんながなれるかというと、そこまではという気持ちの方のほうが実は多い。横の吹き出し口に皮肉めいたことを書かせていただいています。「人生１００年、生涯現役、それを言われると疲れるんだよね」と言う方もよくいらっしゃいます。

そんな中で、「生き方を見つけられず、さまようシニア達…」と書かせていただいているのですが、昨今、終活ブームも起きています。結構長い期間続いていますが、これだけ

出版不況の時代に、本屋さんに行くと終活関連本がどっとコーナーにあります。やはりそれだけ皆さん迷っている。終活というのを見ると、お墓の話、葬儀の話、病院・介護の話がメインで、自分の終わり方という分かりやすいところで何か見つけることで少し安心感も得られるので大流行しているのかなとは思うのですが、実は終活というのはこれだけではなくて、勘違いが横行しているのもあります。この裏事情としては、終活講座をやるところがいわゆる保険屋さんだったり、それから葬儀屋さんが終活セミナーをやる。それは自分の商売に引き込みたいからその部分にスポットを当てる。それから、自治体がエンディングノートを配布することも最近積極的に始めています。その中を見ると、やはり終わり方の本当の最後の部分を一生懸命扱っている。どちらかというと、もっと終活に、特に人生１００年と言われる時代の中でみんなが求めているのは、体力、気力は落ちていく。でも、その中でそれなりの今の自分らしさや自分のつながりをある意味リメイクですね。少しずつそれなりの部分を見つけていける終活。要は、長くなる時間をそれなりに折り合いを付けて自分らしさを見つけていけることが実は終活の一番大きなテーマだったりもするのですが、その最後の最後の部分に結構スポットが当てられていて、そこにどうやって学びの機会をやっていけばいいのかというのは結構大きな課題かなと思います。

更に言えば、終わり方という部分は、お墓がないと困るなど分かりやすいのですね。でも、自分の老いていく部分に照らし合わせながらそれなりの生き方を見つけていく部分は人の人生の分だけ多様です。多様性と書かせていただいているのですが、多様だ、多様だといっても、その中で豊かさの共通する土台の部分はありますよねというところが次からのスライド３枚になります。

地域って私もよく分かりません。町内会、自治会の単位や行政の単位などいろいろ言われていますが、地面がつながっているコミュニティと捉えたときに、地域とは無理やり周りが押し付けた何とかではなくて、人生の終わり方、自分らしい生き方を考える場で言えば、近場という発想がすごく大事になっていくというのがこの折れ線から見てとれるかと思います。これは老年学の大御所である東京大学の秋山先生が取ったデータですが、人の自立度がどのように変化していっているか。亡くなるまでをずっとウン千人追跡したデータになります。左側が男性、右側が女性になります。縦が自立度で、横軸が右に行くに従って年齢を重ねていくということです。折れ線を見ていくと自立度がどう変化していくかが見えてくる。パターンは異なってくるのですが、一番マジョリティと言われるところを見ると男性の赤線と女性の赤線で、男性ですと８割、女性ですと約９割が７２～７３歳か

らです。それまでは本人たちも、自分が高齢者だと言われると違和感を覚える。自分はまだそこの仲間入りはしていないと言い張るくらいですが、何か体の疲れが取れない、電車に乗ると疲れる、そんな小さな変化が少しずつ重なり始めるのがこれぐらいの年齢と言われています。そこで、交流や人とのつながり、外出、行動半径を併せて見ていくと、ちょうどここに合わせられるように自宅を中心にして徒歩・自転車圏の近場と言われるエリアに段々自分のコミュニティが狭まっていくのが一つ見られます。そういう意味でも、その先の長い人生を考えたときに、なるべく早く、地域というのは少し重いです。でも、近場、自分の自宅周辺にどれだけ自分のつながりや自分の居場所の種を持っておけるかというのが結構重要ですね。

最近ですと横浜市青葉区さんと、高齢になってからそういう学びを得ても動ける人は少ない、早いほうがいいということで、５０代ぐらいの世代を対象にリーフレットを作ったり、「ライフ１００ＢＯＯＫ」を作ったりもさせていただいて、近場に種をまく。早ければ早いほどという意味合いを早めに伝えていくことも重要だという話もさせていただいています。これは、年を重ねるだけではなくて、子育てや家族の介護みたいなことが加わったときにも、自分にとって意味のある居場所や場というのは近場なのかなというのが一つになります。

それから、私の研究テーマでもあります距離感を持った関わり方という部分も共通のテーマ、土台になってくるところで、横棒グラフは、健康長寿に良い関連を及ぼす何とか体操など、いろいろなことを言われています。それを全部式の中に入れて、何が一番効くか。何十項目を入れて、トップ６がこちらになっています。上を見ると、やはり社会との接点が多様なほどいいという話が出てくる。社会参加していろいろな人と会ったほうがいい。でも、高齢期の心理となっていくと、自分のなじんだ関係性や自分のなじんだ場にどんどん縮小させていく。選択して自分の豊かさを守っていきたい。ある意味で保守的になっていく中で、これを求めるのは少しきついみたいなところで何が大切なのかとなってくると、自分の程良い距離感でつながれるような関わり方が一つ重要になってくる。そして、その量というのは何の意味になってくるか。自分の程良い距離感で関われる場やつながりに出会うためには、やはり多様な人たち、多様な場に出ていかないと、そこにどんぴしゃり合う人に出会うことができないという意味合いで、高齢期は種類や量が多いというのはその先の質を高めていくという発想も重要なのかなと。

三つ目のポイントとしては、少しのプロダクティブということも重要になってくる。要

は、高齢期は自分ができないことや助けてもらわなければいけないことが増えてきます。これは高齢の方々だけではないと思うのですが、受け身、助けてもらうだけの人生はやはり厳しい。明日も生きよう、頑張ろうという気持ちになかなか心が向かない中で、自分以外の誰かに、別にボランティアだけではなくて、何か楽しい場を教えてあげる。誰かを笑わせる。「君ってすごいね」、これも誰かに元気を与えていますよね。自分以外の誰かを意識して、自分のできることを少し分けるところが重要ということで少しのプロダクティブ。大人も子供も関係ないと思います。仕事をしていると無意識にこれをやっていますが、高齢期はがっつりなくなります。子育てが終わるとがっつりその部分がなくなって、「自分て何なのだろう？」というところで空の巣症候群に女性は割と陥ったり、男性も退職をした後に空っぽになってしまう方もいる。プロダクティブの種を人生１００年の最後までどれだけ持っておけるかというのも重要です。

三つと申し上げたのですが、もう一つだけポイントで、ジェネラティビティという言葉でも言われています。同じ世代間の中だけでやり取りしているのでは意味がない――意味がないわけではないのですが、今ほかの世代に自分たちの何か力を発信することは、例えばここに挙げさせていただいている一番分かりやすいところで言えば、企業を退職した人たちが知識、経験を生かして将来のノーベル賞を育てたい。子供たちの科学教育に学校のサポートをしに入っている団体さんがここに書いてあります。これはみんながハッピーで、やはり世代間交流はいいよねという話なのですが、それだけではなくて、こうやってシニア世代に力をもらった子供たちが大きくなったときに、シニアに対してやほかの世代に対しての理解が高まった子供たちが育てられる。こういう循環が繰り返されることで、恐らく地域や社会が多様性などに自然と変化していくということで、これは種なのですよね。世代間が接点を持つ。でも、それを意識してつくっていかなければ、今の世の中はなかなか自然に多世代がというところはないよねと書かせていただいています。

ジェネラティビティとシニアの方々に言うとすごく気構えてしまって、「そんなの無理、無理」と言うのですけれども、例えばバスで挨拶をしている背中、「ありがとうね」と降りていくのをうちの子供がまねするようになったのですね。そんな小さなことも世代間交流だったり。それから、大人と子供だけではないです。例えば人生１００年の中で言えば、６０歳の人が８０歳の人と何か接点を持つことで、８０歳のこれからの自分の生き方をイメージできるようになる。（海老原委員入室）

というようなところでこのジェネラティビティの組合せも多様で、コミュニティに求め

られている。特に地面がつながったコミュニティだけではないと思います。社会全体に求められている多様性という言葉の中には、もう一つ、緩やかさという部分をしっかりととらまえていく。更に言えば、多様な種まきをしていく中で、どれか一つ自分の関われるものを見つけられるようなことをイメージしてつくっていかなければいけないということで、今足りないものを分析しながらつくっていかないと、そこになじみたくない、なじめない人が出てくるところをお伝えしました。

では、出てこない人になじんだ誰かの種をまくということで一つ。実際、神奈川県庁さんとやらせていただいていることですが、既にある場、仕組みで新たな居場所をつくることをご近所ラボという名前でやらせていただいています。公民館や例えば生涯学習の場に出てくる人は意識が高い人たち、既に地域に接点のある人たちがすごく多いように思います。そこにどんな講座をやってもやはり来ない人は来ないと分かっています。では、その人たちでも出ているような場にその学びの種をまいていかないと、そこの人たちにヒットすることが永久にできない。例えば日曜日のホームセンター、奥さんの買物についてきて回遊するような男子たち。日曜大工大好きで、暇だからただ見て回ってお姉さんをからかってみる。そこにホームセンターがやる企画ということで、地域に接点を持てるような講座をホームセンター主催というていで、でも、行政などが後ろからバックアップしながら種をまいていく。それぞれの場所、役割分担で、役所の役割、中間支援の人たちの役割みたいに書かせていただいているのですが、ホームセンターもそうです。

実際にやったのは家電量販店です。電子工作が昔好きだったおじ様たちをどうやったらとらまえられるのだろう。文句だけ言うおじさんたちにならないようにというところです。ショッピングモールにある大規模家電量販店の入り口で、孫世代が今学んでいるプログラミングをみんな体験してみませんかというていで囲い込んでくる。最終的には、地域や、学校でシニアたちが先生方のプログラミング教育のサポートをしようという動きの団体さんにつなげていこう。今やっているアプローチよりももっともっとその方々の生活の中に種をまいていくということでいろいろな組合せができるのではないかと、種を増やしていくことを始めています。

私なりのない知恵を絞って、こんなことができたらすてきだなというところで、シニアは今人生１００年の中でどう生きるか学び直したい。それから、地域というもの、自分が住んでいる地面というところにあまり意味を感じていない。でも、年を重ねれば重ねるほどそこは意味のある場になっていく。いかにそこに接点を持って、これからの生き方をそ

の場でどう構築していくかということをどこでだったらできるのだろうと考えたときに、都立高等学校でご近所ラボをやってみたらどうだろうと。ご近所ラボは、今までは家電量販店やいろいろなところで考えてきました。都立高等学校でこれをやるのは何になるのだろうと考えたときに一つ思い付いたのが、皆さん御存じのことだと思うのですが、最近、日本の大学でもサービスラーニングで、地域やＮＰＯさんやいろいろな団体さんに学生さんたちが出ていって、そこで一緒に活動する。ここにもいろいろ挙げさせていただいているのですが、調べると、自信の獲得や、いろいろな研究論文が出ています。地域にとっても、来てくださる団体さんにとっても新たな知恵や刺激、お互いにとっていろいろな良い相乗効果がある。例えばＩＣＵは、最初は海外のフィールドで始めたのですけれども、住んでいる地面、日常生活をイメージできなければということで、三鷹市さんと今連携してサービスラーニングをやっています。三鷹市さんの中でＮＰＯさんや市民団体さん、町内会、自治会さんも手を挙げています。例えば井の頭一丁目町会さんが学生さんに、自分たちはこんなことを一緒にやりたいですと提案したのが、シニアへのスマホ個別対応相談会と小学生の放課後の居場所ともう一つ、これはすてきだなと思ったのですが、学生さんたちがこのまち、地域をよくするためにやりたいことを町会で全力で応援しますと。「提案して」みたいなところでサービスラーニングの輪が少しずつ広がっています。

ただ、良い効果もあるのですけれども、ＩＣＵは割と長めに設定しているらしいのですが、１８時間で学べることは、ようやく形が見えて動けるようになってきたところで終わってしまう。

それから、中高年にとって、これはやる意味があるのではないか。ただ町会に入りましょう、地域に関わりましょうといったら二の足を踏みます。でも、サービスラーニングという可能性の中で、ある意味、自分の可能性、地域というところの生き方を学んでいたけたらいいのではないかというので、多世代が地域を学ぶサービスラーニング。シニアだけ集めるとすごく暗い感じがするのですけれども、高等学校に来ている高校生や、その高校生がこんなことをやりたいということをシニア世代が一緒にプロジェクトを組んで応援するような組合せ。シニアっていろいろ文句は言うのですけれども、一番文句を言わない、殺し文句は「若い世代を応援しましょう、若い世代を育てましょう」。ここは皆さんすごくどきどきするキラーワードです。そういう意味では、都立高等学校でご近所ラボ、サービスラーニングという場をつくるところはシニアにとってもいろいろな良い可能性が出てくる。

というところで、ここにいろいろ書かせていただいているのですが、徒歩圏・自転車圏の中高年。子供たちはその圏域の子たちばかりではないと思うのですが、参加するシニアに関してはその都立高等学校のあるエリアの徒歩圏・自転車圏、そこの地域の中高年さんたちが程良い距離感で生活する地域について学べます。それから、被災時、病気や事故や加齢に伴い思うように動けなくなる前に、気軽に地域に関わるきっかけになるのではないか。若者や誰かに何かをシェアできる。ある意味でプロダクティブな場にもなるのではないか。都立高等学校の学生さんにとっては、いつもの学校でサービスラーニング。勝手にシニア、地域が学校に来てくれることで機会が得られる。自分の住んでいる地域コミュニティを――そこはそうではないですけれども、何かイメージできる一つのきっかけになる。地元都立高等学校を媒体にすれば地域に関われる人というところを一つのターゲットにこんなこともできたらいいのではないかなと、ない知恵を絞って提案させていただきました。

すみません。少し長めにお話ししてしまいましたが、どうもありがとうございます。

【笹井会長】　どうもありがとうございました。

ただいまの御報告、御提案について、まず質問といいましょうか、もう少し細かく教えてみたいなのがありましたら是非お出しいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。どなたからでも結構です。

【竹田委員】　ありがとうございました。とても共感することが多く、是非やりたいと思ったのですけれども。

質問として、サービスラーニングをお年寄りがやっていくということは、私も高校生と大人の多世代の共創を考えたときに非常に難しいという感覚を持っています。それは、お年寄りと高校生のコミュニケーションがあまりにも違う。あと、私も高齢者向けにプログラムをやったときによく言われたのが、自分でアイデアを考えたり、自分で何かやること自体に今の６０代や５０代は慣れていないから、いきなりそこは難しいのではないかというフィードバックを頂いたことがあったのですが、今回、井の頭一丁目町会の例がありましたけれども、その住民の研修などもしっかりやって行っているのか。できる高齢者の方だけが集まってきてやっているような形なのか。その辺りでうまくいった事例であったり、こうするとそこがうまくいったということがもしあれば知りたいと思いまして、質問いたしました。

【澤岡委員】　まず、自分のアイデアは、大企業の方々などは特にプロジェクトで動くことに慣れていたり、自分の意見を出すこと自体がすごく苦手な方々も多くて、それは次

のステップなのかなというところの最初のプチ成功体験ですね。若い人たちを応援することで、都立高等学校の高校生の方々がこんなことをやってみたいということを一緒に考えて、それをバックアップする形でなら、そういうのが大好きな方々も結構多いのでうまく入ってきやすい。ただ、そこを、おじさんだけではないのですけれども、おじさんたちが言い過ぎないようにコーディネーションする。誰がそれになるのだろう。先生は無理だし、そこがすごく悩ましいポイントではあると思うのですが、コーディネーションする人がキーになって、その辺りのコミュニケーションも。

あとは、コミュニケーションの難しさもある意味で教材に変えていただけたらとは思っています。年を重ねると、昔はあんな人ではなかった人が段々面倒臭い感じになってきた。それもしながら、では、どうコミュニケーションを取るか。シニアとそういうことを経験すると、自分と価値観や文化の違ういろいろな人たちと出会ったときもそこはすごく力になる。それすらも教材にできたらというふうには思っています。

井の頭一丁目町会は、コーディネーターさんという意味合いで言えば、町会長さんがもうコーディネーターの塊で、シニアのスマホサロンなどをやるときも、事前にみんなとどう共感を得るかという部分でしっかり、それまでの町会経営がそういう運営をしてきたので、新しい異物が入ってきても全然なので、そこは少し特殊な事例かなとは思います。でも、見ていると、やはりそこのコーディネーションですよね。そこができる人という部分で、ただつなぐだけではなくて、プロデューサーという視点も必要なのかなと感じています。宿題の一番重要な部分が全然見えてきてはいないのですが、ありがとうございます。

【横田委員】　サービスラーニングということにあまり詳しくないのでとんちんかんな質問かもしれないのですが、サービスラーニングの目的というのは、多世代が交流をすることが主目的なのか。地域の課題を解決するなど、どこに主眼がある活動なのでしょうか。

【澤岡委員】　この中で御専門の方が結構いらっしゃるのではないかと思います。私が説明させていただくのはすごく付け焼き刃な知識ではあるのですが、決して地域や多世代が対象ではなくて、社会を学ぶということで、それこそＮＰＯ活動や自分の関心を持っているような活動の場に出ていって、そこで一緒にある意味で作業をしていく、関わっていく。ただ見学する、話を聞くだけではなくて、自分もその主体の一員となって活動することでどんな変化が起きていくか。活動がどういう意味を持つものなのか、体験を通して自分で体得していく。その中で、こういうことを自分が発信したら、こういう動きをすればこんなことが起きるのだ。それは学校のふだんの学びではあまり見えてこない部分だった

り、ここに書かせていただいているのですが、自信の獲得。今までただ偏差値が高いだけでは出てこなかったような子が結構ここで活躍する。それから、新たな発見がいろいろあるので、これも知りたいとなると、今まで興味のなかった分野を学びたいという学習の動機付け。それから、さっきのコミュニケーションの話。そういう場に出ていくことは人に話を聞いてもらう。そのためにはどう伝えればいいのだろうという話。論文を見ると生活やアカデミックスキルの向上と書いてあったのですが、市民性の獲得という意味では、ふだん生活していると、自分の親すらも社会性や社会活動などあまり意識しないまま一生懸命働いて毎日を過ごしている中で、社会の一員になるとはこういうことなのだということを、こういう場に出ることで自ら知っていく。その辺りを、大学生だけではないと思うのですけれども、学生さんが体得するための事業というふうに書いてあったように思います。

【横田委員】　ここは大学が行っているという書き方や、町内会が実施しているということで、主体はその学校であったり自治体であったりＮＰＯであったり、いろいろなところが主体となって実施されているという理解でいいですか。

【澤岡委員】　大学のコーディネーターさんが、例えば、ほかの大学で多いのは、過疎になっている林業のところに入っていく。それから、海外の飢餓で困っている子供たちのところの活動に入っていく。コーディネーターさんがいろいろな活動の種を集めてきて、それを学生さんたちに見せて、あなたの関心のあるところにあなたの意識を持って入っていきましょうという形でやっているところが多いようです。

間違っていたら申し訳ありません。どなたかフォローしていただけたらと思います。

【主任社会教育主事】　会長、サービスラーニングについて御説明を簡単に。副会長かどちらか。

【澤岡委員】　もしよろしければ専門家からお願いいたします。

【主任社会教育主事】　それぞれいろいろな理解がある部分なので。

【笹井会長】　よくアメリカの大学などでやられているのですけれども、学生さんが地域の課題を探究して、地域の課題は何があるか。要するに総合的な学習の時間の大学生版みたいなところがあるのです。情報を収集して、課題を抽出して、それについてみんなで考えて、特に地域の人たちにインタビューやヒアリングなどもして、どうしたらいいかを考える。それについて、学生さん、あるいは１人なり２人なり、グループが多いのですけれども、それなりの方向性や、どういう方向で解決したらいいのか、それを大学当局にレポートバックして、それを単位化する。ひどく雑駁に言うと、そういうようなプログラム

なのですね。ですので、より地域に入っていって、地域の課題をそれなりに把握して、それについての解決方策みたいなものを探る。それを学生、若い世代だけではなくてシニアの世代にもどうですかということを御提案だったと思います。

アメリカに詳しいでしょう……。

【志々田副会長】　いや、アメリカに詳しくないですけれども。会長が今御説明されたこととほぼ一緒ですが、大事なことは、大学でサービスラーニングと言われているのは、自分の専門分野や自分が学んでいる、自分ができることを社会の中に当てはめてみて実際に使えるかどうかを本番で試すという要素がすごく高いので、シニア層にサービスラーニングとしたら、それまで培ってきた知識や経験がサービスラーニングにつながるとすごく良い展開になるのかなと思って今聞いてました。

【主任社会教育主事】　サービスラーニングというと、どちらかというと学生の教育の手法みたいな文脈で語られていることが多かったと思います。

【笹井会長】　そうです。

【主任社会教育主事】　東京都の場合も、いかめしい名前で始まった「奉仕」という中の１単位時間３５時間のうち１８時間を当時は体験活動に充てて、英語訳はサービスラーニングと当てていたのですね。実はカリキュラムベースを見ると、この生涯学習審議会の委員だった方なのですけれども、元々アメリカのコミュニティ・サービス・ラーニングの研究をしていた方にプログラムのベースをつくってもらいました。要するに、事前学習をして、体験活動をして、振り返りと自己学習をしながら学習のサイクルをつくる。Project Based Learning みたいな形でサービスラーニングが言われてきたほうが多いかなとは思います。だから、それを生徒の側というか、子供や学生の側から見たらサービスラーニングになって、シニアの方から見たらどういう言い方がいいのか分からないですけれども、基本的には教育をベースにした学習の方法だという理解を私はしていました。

都立高等学校では、「奉仕」が今「人間と社会」という名前に変わって、１５時間だったか、少し減ってしまったのですけれども、地域課題を見詰めて、現場の中で物事を考えるという枠組みの授業は持てているのです。だから、例えばこういう話などを積極的に具現化していく学校がこれからあるといいなと思って伺っていました。

すみません。余計なことを言ってしまいましたけれども。

【笹井会長】　多くのアメリカの大学の場合は Capstone Program ということで、要するに卒論みたいなもの。今までやってきたことの総まとめみたいなもので、地域に入って、

御自身の専門性を生かしてサービスラーニングして、それをまとめてという話で、最後の最後にするラーニング・プログラムみたいな形になっているのですね。

私からの質問になってしまうのですけれども、学校教育は単位化されているわけですね。だから、クレジットが付いて単位化されていて、ある種の卒論みたいなもので、地域に入って卒論を書くみたいな形になるのです。そういう学校教育のシステムの中での一つの教育活動あるいは学習活動になるのだけれども、それを地域のシニア層と一緒にやる。地域のシニア層が主体的にやることになるには、学校教育システムの外で、すごく自由にいろいろな活動をしたがっている人たちなわけですから、そういう人たちにサービスラーニングを当てはめるというか、適用するには相当の工夫が必要ではないかと思うのです。何か意見になってしまっているみたいだけれども、その辺はどういうふうにお考えでしょうか。

【澤岡委員】　全部のシニアに共通するアプローチでは全然ないと思うのですが、知的好奇心がある、知識・経験があるという自負があるシニア層で、そんなにお金にも困っていない。例えば東京大学の何とか先生が生涯・エクステンションでしゃべるよと言うと何をおいてもいらっしゃる。そういう方々がもったいないと思うのは、学んで、それが自己の学びで終わってしまっているところです。学ぶこと、そこに対して達成感を持つ方々が一定割合いて、その方々がそこのスパイラルにずっとはまり続けると評論家になってしまうという悪循環がある。そういう方々がそれこそ学び、サービスラーニングという言葉がいいのか分からないのですが、この場で自分の地域やほかの世代のことを学ぶことで、評論家ではなくて、自分がそこの主体になるというふうに行動変容していっていただけるといいのかなというイメージで、いろいろなおじ様方を思い浮かべていました。

今、男性の想定でお話しさせていただいているのですが、地域課題の大きな一つの部分としては、おひとり様と呼ばれる、生涯おひとりを貫いてこられた、自分で選び取った、働いてこられた女性の方々が地域の中に今段々増えてきています。そういう方々は、専業主婦をやってこられた方々とは少し違う居場所が必要で、そこに入っていくと女性は女性に厳しいみたいなところもある。だからといって男性主体のほうに入っていくと、会社で虐げられていた嫌な思い出がよみがえってきたりする。女性でおひとりで働いてこられた。知識、経験も持っている。参加してもいいよという部分は、地域のサロンではなくて、知的好奇心が満足されるような場や、ほかの世代に何か力を発信できる場を求めている。少し違う場づくりをしなければいけない方々も地域に増えています。

そういう意味では、男女で働いてこられてという方々が何か力を発揮できるための一つ

の仕組み、仕掛けとしてサービスラーニングというものがうまく機能していって、それがそこの高校生などとお互いに良い相乗効果があるのであればいいかなというところではあるのですが。

【主任社会教育主事】　　ご近所ラボという名称は、今インターネットで見たりすると、新橋でもやられていて、これはどういう流れで発想が出てきたのか教えていただけないかと思います。

【澤岡委員】　　調べたら、そちらのご近所ラボがどうやら先だったというのが分かったのです。県庁の方々と、これに何という名前を付けたらいいのかなと。シニアたちも、塾やラボという言葉が大好きな種族の方々を対象にしたかったので、ラボ。皆さんのご近所にラボが来たら、それは参加するでしょうという乗りでご近所ラボにしたのですけれども、よく調べたら、先に、それも同僚の共同研究者がご近所イノベータという地域を活性化する仕組みをつくっていて、パクられたと最初は思ったのですが、どうやら私がパクった。一応、本家には御挨拶をしているので。

【主任社会教育主事】　　慶應義塾大学とやっていると出ています。

【竹田委員】　　坂倉先生。

【澤岡委員】　　そうです、そうです。

【主任社会教育主事】　　慶応義塾大学は芝の家など、コミュニティ何とか、うちの実家みたいな、結構そういうプロジェクトを三田あたりでやっているのですね。

　あと、神奈川県庁のどこの部署がやっているのですか。

【澤岡委員】　　名前がころころ変わってしまうのですが、いわゆる総合政策みたいな大きな企画立案をするようなところです。

【主任社会教育主事】　　高齢福祉の部署や、そういったのではないのですか。

【澤岡委員】　　ではなく、そこがかながわ人生１００歳時代ネットワークというネットワーク体をつくって、大学から市民団体から企業から、みんながそこに来るとフラットにネットワークがつくれて、人生１００年時代の様々な諸課題を解決できるよねと。高齢者と地域という部署を私が担当しているもので、そこで、みんなで困っているというか、地域に接点がない人たちにどう力が発信できたり関わるきっかけをつくれるかというところで出てきたのがご近所ラボです。

【主任社会教育主事】　　やはりそういう部署がやっているのだなと思いました。

【澤岡委員】　　黒岩知事が大好きな感じのネーミングにしました。

【笹井会長】　　どうでしょうか。別にご近所ラボに限らずですけれども、ただいまの御発表に関連していろいろ御意見、御質問などあれば頂ければと思います。

【福本委員】　　前回の会議でも発言させていただいたのですけれども、今回も施設開放というところから、かなりそれの捉えが変わってきていると思うのですね。拠点にはなるかもしれないけれども、場所として教室の中などという発想が全くないと思うのです。逆に言うと、教室から飛び出た活動になるということは、そのシステムづくりというか、そこが難しいかなと思います。教室の時間の中でできてしまったほうがずっと楽なわけですから、施設開放の捉えが以前とは変わってきていると思うので、そこのところをもう一度この審議会でも考えたほうがいいのかなと思いました。

もう一つ確認ですが、ご近所ラボというのは、どちらかというと高齢者の方が学ぶというイメージなのですけれども、受け身というか、学びの材料をこちらが提供して、高齢者の方がそれを学んでいく。いわゆる受け身的なものですけれども、サービスラーニングというのはその逆を狙っていらっしゃるという理解でよろしいですか。

【澤岡委員】　　まずは、ご近所ラボの発想が、自ら何か発信したい、こうやりたいという部分を引き出すために、その前段でプチ成功体験。何か一緒にプロジェクトに関わることで、あっ、こんなふうに変わるんだという部分の前段の種まきが必要かなというところがご近所ラボのやりたい部分だったりもします。そういう意味では、まずは自分の発信したい、こんなことをやりたいという種まきが、学生さんたちとサービスラーニングを都立高等学校でやる第１のゴールなのかな。そこの人たちに自己発見があって、更にその次のステップとして自ら発信をしていって、それを一緒にやっていくのもその場でできていけばいいのかなと思ったりしました。

【福本委員】　　だとすると、ここの中で既にステップがあって、第１段階、第２段階のパッケージのような形で、何でもかんでもアラカルトで取っていくよりは、こういうふうに積み重ねていくと良いプログラムになりますよという見せ方をすると、より魅力的になるのかなという気がしました。ありがとうございました。

【澤岡委員】　　ありがとうございます。今まで、例えばタリーズさんや家電量販店がご近所ラボの一つの拠点というイメージだったのですが、そこだと長い関わりがなかなか難しい。都立高等学校は地域の中にずっとでんとある一つの拠点で、教室の中だけで収まるわけではないのですが、そこを拠点に長い関わり。学生さんも、今までは１５時間と結構時間が短いところで地域の変化はなかなか見えないまま終わってしまう。なかなか仕組み

をつくるのは難しいと思うのですが、都立高等学校の中にその拠点が出てくることで、学生さんも卒業するまで長期的に、例えば自分が関わった子供の居場所が変化していく姿や、シニアが変わっていく姿も見ていけるような、常設というか、ずっとある場だからこそできることもあるのかなと。漠然としていて、すみません。

【主任社会教育主事】　今の福本委員の話も聞きながら思い出したのですけれども、令和型の学校教育改革の中で普通科改革が挙がっています。そこの中で地域連携型モデルが一つあって、どうも調べてみると、地域学校協働本部をつくらなければいけなかったり、コミュニティ・スクール化しなければいけないみたいなのがあるにはあるのですけれども、例えばそういう文脈の中で検討していくのは一つの方法としてありかなというふうに聞いていました。教育改革の流れや、福本委員が言われたことはすごく大事で、どう整理していくか考えていかなければいけないのですけれども、今使える枠組みはどこにあるのかと考えてみると、今みたいな発想をどこで持ち込めるかというと、教育改革、学校改革の流れの仕組みの中に位置付けてみるのも一つのやり方かなと。

もう一点、少し言い過ぎなのですけれども、これから文化部活動の在り方も７月に文化庁が提言を出す。スポーツのほうが先に出て今いろいろな話題を醸し出していますけれども、単視眼的に見るといろいろと難しいことはあると思うのですけれども、例えばボランティア部みたいなのを持っている学校なども全くないわけではないので、そういうところのアイデアみたいな形で持ち込んでみるのもこういう発想を生かすツールかなと思って私は聞いていました。

【志々田副会長】　私、社会教育にずっといて、熱くて、もういいというぐらい、うわっと来る人たちと一緒にいるので、今日お聞きした適度な距離感を保ちながら地域の活動をするということ、そういうサンプルがなかなかないのですね。それは何がコツになるのかな。コツになるのかというよりは、それはなかなか難しい問いなので、何があれば適度な距離感というふうに感じていただけるのか。そこの違いみたいなものを教えていただけると参考になると思いました。

【澤岡委員】　やはり自分のテリトリーを守りたいという意識がすごく強い方々なので、ある意味、自分のテリトリー感が守れる。自分でコントロールできる感がすごく大事です。地域は、一回巻き込まれるともうコントロールが利かない感じになって、楽しく巻き込まれるか逃げるか、どちらかみたいになる。それを守るためには、何か介在する、媒介する。それこそ学校という場だったり。中間支援組織だとなかなかそれは難しいと思うのですけ

れども、学校でこういうことをやるところで関わる。これ以上は巻き込まれないという安心感みたいな、自分で関わり方を選べる部分。そこでプチ成功体験で何か楽しいというのがあれば、自分からどんどん入っていくというふうにはなっていくと思うのですが、そこで止まりたい人もいる。止まれるという担保された何か。やはり仕組みがありますよというのが一つの安心感にはなってくるのかなと思うのです。

【志々田副会長】　そうすると、ワンクールみたいな期間が限定されていたりということですよね。

【澤岡委員】　だと思います。

【志々田副会長】　そういうのを見せていくということですよね。

【澤岡委員】　可視化していくことが心の壁を少し下げるというか。

【志々田副会長】　エンドレスの人たちしか思い浮かばないので。

【澤岡委員】　すごく分かります。

【志々田副会長】　ありがとうございます。参考になりました。

【澤岡委員】　逆を言えば、ここに関わるシニアは二つのシニアがいます。距離感を求めるシニアと、そういうシニアを巻き込みたいけれども、熱く巻き込もうとし過ぎて敬遠されている、地域でいろいろ熱い活動をされている中高年の人たちが、ここを媒介にして距離感を保ちながら接点が持てる。お互いを知ることができる。最近、町会長さんなどの研修もやらせていただくのですけれども、皆さんの意識を変えてくださいというお話をしています。プチ自分をつくろう、担い手さんというのは間違っていますよねという話の中で、そういう人もいるのだ、そういう関わり方を求めている人がいるのだ。この場に来るとこちらの人たちも学べる。ある意味の異文化交流というか、多様性があるのだということを双方が学んでいくところで一番いいラインをお互いに見出していただけるといいなと思ったりもします。

【笹井会長】　今の御意見に関連してですが、私もいろいろな自治体で世代間交流事業を山ほどやってきたのですね。大体失敗しているのですよ。それはなぜかというと、極端に若い子と極端に年を取っているシニアの人たちしか集まらない。シニアの人たちが若い人たちに、例えば子供などに竹とんぼの作り方を教えて、子供は「楽しい」と言って、シニアの人は自己満足なのですけれども、良かったねという話です。それは交流なのかと正直思っていました。ある種の課題の共有というか、テーマ性の共有みたいなものが一緒に何かやるとき必ず必要だと思うのです。そういうものを生み出せる場をこういうことで本

当につくれるのかというのが正直な疑問としてあるのですが、その辺はどういうふうにお考えでしょうか。

【澤岡委員】　そこは私もまだイメージが……。これをひねり出すのがやっとだったみたいなところなのですが、最初の第１段階のステップとしては、子供たちの何か思いや考えを応援する部分で、子供たちの課題に寄り添っていく。それこそ言葉を換えれば、「皆さん学んでください、何とかしてください」ではなくて、「皆さんの知識、経験を生かして子供たちの夢を応援してあげてください」みたいな働き掛けの中で少しずつ距離感を縮めていく。

その中で、世代間交流は良い側面ばかりが強調されがちですけれども、やはり年を取れば頑固になるということも世代間交流で学べる一つのことですし、お互いの違いを知ること抜きではその次のステップに進めない。子供たちの立ち上げているプロジェクトを大人が手伝っていくというか、まだイメージは湧かないのですけれども、そういう関わりの中で日々――会社でプロジェクトチームを組んでもやはり気に入らない人やいろいろいる中で、それをやらなければいけないミッションの下で一緒に走り始めると、あの人はそう言っているけれどもこういう人なのだなという理解がお互い深まったりする。そういう場を一緒に共有することがある意味で世代間の変なステレオタイプを取り除いていくことにもなるのかな。すみません、全然きちんとしたお答えにはなっていないので。

【笹井会長】　ありがとうございました。勉強になりました。

【竹田委員】　多世代で何かつくっていくときに、私も笹井会長と同じでいろいろな失敗を見てきたし、私自身も失敗してきたことがたくさんあります。その中でも関係性の深さというところで、子供からするとありがた迷惑なことがたくさん出てきたりして、「そこはもう分かっています、逆に僕のほうが詳しいです」みたいなこともがんがん言われる。でも、そこも「ありがとうございます」と言わなければいけない苦しさがある。子供視点に立ったときに、そこをうまくお年寄りの皆さんのアドバイスを変えていくというのはかなり専門性があるとすごく感じているのです。

逆に成功体験で見たことがあると思うのは、大人側が発表して子供が関わるときは割とうまくいくことが多いと思っています。すみません。どこの事例だったか忘れたのですが、例えば、まちの人たちが学校に行って自分の夢を語る。こんな課題がある。お祭りがあるけれども一緒にやってほしいというものを大人側が出して、子供たちが乗っかる分には割とうまくいく。子供たちとしては、逆にお年寄りを応援したいという思いでそこに参加し

ますし、お年寄りの方も、子供のためにというのも少しはありつつも、自分のためにやっていらっしゃるので、変にお互いが押し付けがましくなく協働できる。

サービスラーニングという言葉を聞いて私がすごく良いなと思ったのは、普通、学生発で何かを応援してもらうことが多いのですけれども、そうではなくて、大人側が悩んでいることや困っていることを積極的に発信して、それを子供たちが一緒に考える。応援する・される側の交代をしていくことができたらすごく面白いと思いました。そういった意味で、梶野主任社会教育主事のおっしゃる学校改革の中に位置付けるところはすごくいいなと思いつつ、それも一つの選択肢として、もう一つあるとすれば、ほかの部署の目的で利用する。何番でしたか、Ⅳ番のカテゴリーがあったと思うのですけれども、そこに位置付けるのも一つの手かなと思いました。あくまで高齢の方が地域に入っていく一つのオプション、生涯学習のプログラムとして学校の中でやりたい。学校でやる意味を私なりに考えてみると、例えば思い出がきっとありますね。青春の思い出が学校にはきっとあって、公民館などだと面白くないと思っているお年寄りの方も、学校でやることに面白さを感じたりする人がいるのかな。質問も含めてですけれども、いるのかなと思いました。

あと、東京はどうか分からないですけれども、特に地方は、ＯＢ、ＯＧが母校に関わりたいという思いが強い。私もたまに同窓会で関わったりするのですけれども、母校でやることだけに価値があると思っています。正に地域でなくて近所というところに相当な価値があると思ったところです。東京だったら、もしかしたら３０分ぐらいのところに母校が実はあって、そこに通いながら母校にみんな集まって何か一緒になって考える。そういう場が都立高等学校などで行われていくと、ＯＢ、ＯＧ資源の開拓も学校の中でできますし、あくまでそれはお年寄りの方のためにやるもの。そこに高校生が手伝いに来れるよ。そういう枠組みでつくっていくと、結果的に高校生にとってもすごく学びがある。でも、事業としてはあくまでシニアの方々のためのものとしたほうが結果はうまくいったりするのかもしれないとお聞きしながら思いました。

【松山委員】　考えがまとまらないのに手を挙げてしまったのですけれども、高齢者というか、中高年の方の交流などで、自分の地元の地域などで考えると、さっき笹井会長もおっしゃっていたのですが、小学生と例えば高齢者の方という組合せだと、それこそ竹とんぼを教えてみたいな感じで割と関係性がはっきりしている。うちの地元の中学校ですと、中学生が近所の高齢者センターなどに、慰問のような形で、演奏しに行ったり発表をして喜んでもらう。しかし、高校生と高齢者世代は関係性をどう保つかというところが結構難

しい組合せではないのかと思います。自我もあって大人に近い世代の高校生と中高年といったときに、中高年にもいろいろな方がいて、特に思いがあって何かしたい人だと、高校生を応援するという形だと逆に少し上から目線的になってしまったりする。でも、高校生はすごく可能性を持っていて、技術や発想で言うと大人が全然持っていないものを持っている。関係性を保つ。どちらも学べる。学び合いが出来るのではないか。知識的なことで言うと中高年世代の人たちが持っている、それを実行する、何か形にする。動画を作るなど、技術で言うと高校生のほうが確実に持っているものがあるので、うまいテーマとプロジェクト設定で一方的にならない関係性をどうつくっていけるかが重要だと思います。

場の在り方とは全然違う話になってしまうのですけれども、というのが何かできないかみたいなことを少し考えています。そういうことができるプロジェクトラーニングの場みたいなものがうまく、一方的にならないのができると成功するものになるのではないかと思っていたので、一方的に高校生を応援するというテーマではないほうがいいのかなと思ったりしながら聞いていました。感想です。

【笹井会長】　今の御意見について、澤岡委員は何かありますか。

【澤岡委員】　ご近所ラボを神奈川県庁さんと最初にやろうといったときも、これは１００通りの答えがあるよね。来てくれる人や子供たちのモチベーションから何からというところで、お互いの得意を生かした役割分担で、関係性のつくり方も、子供たちのモチベーションとシニアのモチベーションで、さじ加減というか、場のつくり方も違ってくるのかなと今伺っていて思いました。そういう意味でもそこのさじ加減ができる、コーディネーションができる人とはどういう人なのだろうとまたまたそこに立ち返ってしまったのですが、さっきおっしゃってくださったように、関係性の持ち方がうまくつくれないと、これはただのよくありがちなことみたいになってしまいそうなので、そこですね。ありがとうございます。

【笹井会長】　それでは、澤岡委員からの御発表と質疑応答等はこの辺にさせていただければと思います。どうもありがとうございます。

それでは、続きまして、今日お二人目になりますが、海老原委員から御発表いただければと思います。御発表していただいて、質疑応答で、その後、議論という形で進めていただければと思います。では、よろしくお願い申し上げます。

【海老原委員】　今シニア世代の発表を聞きながら、外国人の、特に中学校ぐらいまで母国で――中国やフィリピン、ネパールで過ごした子たちは、異年齢対応スキルがあるの

ではないかと思いました。シニア世代への対応力ですけれども、お父さん、お母さんが出稼ぎで日本にいるので、おじいちゃん、おばあちゃんに育てられている高校生もいます。フィリピンの方などは大家族で住んでいるので、小さい子や親戚の子など、この後お話ししますけれども、異年齢のアートワークショップなどをしたのですが、おじいちゃん、おばあちゃんたちと会話しながら下の子たちの面倒、赤ちゃんたちも見ることができる高校生もいました。

これから、外国人の高校生たちのことを中心に発表させていただければと思います。簡単に活動紹介をさせていただきながら、そもそも外国ルーツの子、高校生や若者といってもなかなかイメージが湧きづらいと思うので、どういう背景の子たちなのか。現状と課題、どんな壁に直面しているか。少しイメージを持っていただいた上で、今回の高等学校の教育や、施設の活用の中でどういう可能性があるかといったところを、具体的なアイデアも交えながら、視点や設計について少しお話しできればと思います。

私自身は、ペルーとイギリスで育ちました。特にイギリスは中学生で行ったので、全く英語がしゃべれない中でかなり言葉や文化で苦労しました。でも、周りにサポートしてくれる大人がいたので、１年たった後は現地の生活がすごく楽しくなりました。そんな経験があって、今日本に帰ってきて、足元で育っている外国人の子たちに関わる活動をしています。１０年間どんな活動をしているか、御紹介させていただきます。

最初は日本人の子と外国人の小学生から高校生ぐらいまで、大人も含めてみんなで交流できるようなアートワークショップをやっていました。一緒に映像を撮ったり、ダンスしたり、写真を撮ったりというようなアートワークショップを。児童館や地域団体と連携して２００９年から１４年ぐらいまでやっていたのです。そうしているうちに段々と若者、高校生世代が集まるようになってきました。――ごめんなさい。旧字体の「學」になっているのは、特に意味があるわけではなくて、ＰＤＦの自動変換でこうなってしまっただけです。

何で高校生以上の世代が集まるのかなと思ったら、小・中学生向けの日本語教室や勉強を教える学習支援の教室だったり、大人向けの日本語教室や支援やサポートはあるのですけれども、いわゆるユース世代がすぽっと抜けていました。アートワークショップなどでこんな感じ（２４ページ）ですごくきらきらと活動していた子たちが、高等学校へせっかく行ったのに中退したり、卒業して、少しお金をためて大学へ行くと言っていたけれども、卒業後もずっと同じバイトのままでいるような現状に対して、何かできないかと思って、

定時制高校の居場所づくりを２０１５年ぐらいから始めました。まさしく先ほど話題に出ていたサービスラーニングといった形で、高等学校の部活動を一つの居場所として、私どもＮＰＯと、慶應義塾大学と上智大学で講師をされていた徳永智子先生と、あと高等学校の教員の方と、３者連携という形で実施しました。留学生や大学生に単位として集中講義をし、単位も取れるサービスラーニングとして授業の中でも学びながら、トレーニングもした上で大学生たちに高等学校に来てもらう。高校生たちから見ると、留学生や大学生は少し上のお兄さん、お姉さん的な存在なので、学校に来て楽しくなかったり勉強についていけなかったりする中で、ある意味、部活動が一つの学校に来る楽しみというか、居場所なるような感じでつくっていました。

２０１５年から２０１９年ぐらいまで続けていたのですが、部活動に参加する外国人の子たちは幸い進路も決まって卒業もできてという中で、放課後の部活動に来たけれども来なくなってしまった子が中退していく状況の中で、少し仕組みや制度が必要だと思いまして、近年は政策提言としてこのようなこと（２４ページ）をしていました。

活動紹介として外国ルーツの高校生、若者について概観的なところをお話しした上で、今回の施策としてテーマにどう落とし込むかといったところですが、これはもう既に皆様、テレビやニュースなどで御存じかと思いますが、実は日本に住んでいる外国人人口は数パーセントぐらいで、ほかの例えばイギリスやカナダと比べると多くはないです。ただ、日本人の人口もどんどん減っている中で、外国人の人口は、コロナで若干減りはしましたけれども、例年増え続けています。例えば大学などで講義をして、「外国ルーツの子供などに出会ったことがありますか？」と聞くと、３分の１ぐらいは手を挙げて、「クラスにいました」と言う子たちが多いです。そのくらい増えていると思います。愛知県などは日系ブラジルや南米系の方が多いのですけれども、東京都は、どちらかというと、日系の工場に勤めていらっしゃる方々というよりも、アジアから来た、フィリピン、ネパール、中国あたりの、サービス業で働いていらっしゃる方が多い印象です。

では、その外国ルーツの子供、若者たちは何で日本に来たのか。親が日本へ出稼ぎとしてやってきて、生活が落ち着いた頃に日本に呼び寄せられてやってきた子たちです。最近は日本生まれや幼少期に来た子たちなども増えているので、外国ルーツの子供、若者といってもその中でも多様性があると思います。簡単に言うと、両親のどちらかが外国籍で、詳しくは説明しませんが、お父さんが日本国籍でお母さんが外国籍の場合ですと子供が日本国籍もありますし、両方が外国籍で子供も外国籍という、両方の場合を外国ルーツと呼

んだりします。

日本語指導が必要な外国生徒ですけれども、外国にルーツがあるからといって必ずしも日本語ができないわけではないのです。例えばこの下のＣさんと書いてあるところ（３３ページ）ですが、先ほどお話ししたように日本生まれ日本育ちの外国籍の子もいれば、小５で来日して１年で、外国籍の子で日本語指導が必要な子。こういった日本語がまだできない外国人の子たちは増えていまして、１０年間で１．５倍ですし、高等学校段階を見ると約３倍、２．７倍となっています。子供たちが増えている中で、実は高等学校の中退率はすごく高いです。全高校生と比べると、最新のデータではないのですけれども、２０１８年時点では７倍以上の割合で中退しています。非正規就職も９倍の確率という状況の中で、令和３年度の最新のものでは中退率は若干下がったのですけれども、やはり日本人と比べて、いろいろな事情からこういう状況があるところです。

何で中退や進路未決定が起きてしまうのかというところですけれども、これまで出会ってきた子供や若者がほとんどみんな口をそろえて発する言葉があります。それは、「友達がいない」という言葉です。特に日本に来てまだ１～２年の子などが、なかなか日本人の友達ができない。あと、高校生ぐらいになると相談する相手がいない。進路のことなど相談したくても、親は日本語ができないのと日本の教育システムが分からないので、誰に相談するか聞くと出てくるのが担任の先生とバイトの店長です。母国で育ったコミュニティから切り離されて来日しているので、日本社会との関係性の薄さというか、社会関係資本の少なさというのはあるのだと思います。

また日本語ができないという言葉の壁は本当に氷山の一角だと思っていて、深掘りしていくと、母国から出稼ぎで来て頑張って働いている親御さんたちなので、私がこれまでターゲットとしてきた子たちは経済状況が豊かな子たちはそんなに多くないですし、やはり日本語ができない、文化になじめないところで自己肯定感がなかなか高まりにくい状況があったりします。言葉だけではなくて、高校生ぐらいになると進路のこと。あと、これは外国人特有ですけれども、在留資格、ですね。そういったような壁が彼らが直面するところで、これに加えて、先ほどの相談する相手がいないといった情報格差、経済格差、社会関係資本の格差などがあるような状況の子たちです。

こんな子たちですよという概観を少しお話しした上で、では、どういうふうに高等学校と連携しながら施設の活用をできるか少し考えてみたのですけれども、今回のテーマでもあったユニバーサル・デザインとしての青少年教育を改めて考えていく。誰もが取り残さ

れない教育にどうやっていろいろな方が参加できるか。今回の私の発表であれば、今御説明したような環境にある外国ルーツの高校生や若者が参加するに当たっての前提要件や、どこがターゲットなのか、提供する価値、場の仕掛けみたいなところを少し整理したので、その点についてお話しさせていただければと思います。

これまで皆さんの議論、話を伺わせていただきまして、前提として、高等学校を活用するに当たって、当事者が使いたい、参加したいと思いつつ、高等学校側のニーズにもかなっていて、同時に実施者のＮＰＯのニーズにもかなっている。この三つの輪の真ん中の重なる部分がどこなのかを探っていくところが今後具体的に考えるに当たって必要な視点かと思うのです。まず改めてこの当事者は誰なのか、ターゲットは誰なのかを考えられればと思いました。というのは、ユニバーサル・デザインのことをずっと研究されていた東京藝術大学の先生から聞いたことでなるほどと思ったのですけれども、ユニバーサル・デザインというとみんなが使えるものと考えるのですが、みんなと思いがちなのだけれども、実はこの一人の子のために何が必要かみたいなデザインを突き詰めてつくっていくと、それが汎用性の高いものにもなるというお話を聞いたことがあります。私は研究者ではないのですけれども、確かにいろいろなワークショップやプログラムを考えていくに当たって、誰に来てほしいのか。Ａ君かＢ君かＣ君か、もしくはＡちゃん、Ｂちゃん、Ｃちゃんに来てもらうためにはどうすればいいかみたいなところを突き詰めて考えると具体的な課題が見えてくることがあったので、改めて、どこなのかといったところを少しマトリックス的にターゲット設定を考えたのがこちら（４４ページ）の図です。

端的に言うと、経済的余裕と時間的余裕がある層の子は、私がこれまで接している定時制高等学校に通っているような子たちにはあまりいなく、恐らく公立学校よりも、もしかしたら別の私立などに行っているのではないかと思うのです。そういった子たちは、いろいろな選択肢がある中で果たして高等学校という場を選ぶのか、どうなのだろうと思います。どちらかというと経済的・時間的余裕がない子たちであったり、経済的余裕はないけれども時間はある子たち、そういった下の２層が、余裕はないけれども機会は欲しいといったときに、この子たちが参加できる、アクセスできるような設計をどう考えるのかが大事なのではないかと思いました。左下の層が一番難しいところではあると思うのですけれども、右下は具体的にどんな子かというと、高等学校１年生の２、３学期ぐらいまではアルバイトをしないです。中学校から高等学校に入ってすぐアルバイトをする子もいるのですが、何となくしたいけれども勇気が出ない。でも、何かやりたいと思っている子たちは、

比較的いろいろな機会を求めている時期でもあるので取り込みやすいところはあります。経済的余裕はあるけれども時間がない子たちは、塾で忙しい、習い事がたくさんある子たちもいるので、もう自分の興味関心事の世界ができているので取り込みづらいところはあります。

経済的・時間的余裕はないけれども機会が欲しい子たちにどういった機会を提供できるかと思ったときに三つ考えてみたのです。これはそれぞれ関わりのレイヤーで、先ほど距離感の話が出ていましたが、①は一番距離感がある場合、②はそこそこ、③は少し深くという流れになっているのですけれども、物理的なスペースとしての場が何かといいますと、これ（４６ページ）は勉強している図です。うちの事務所は SHIBAURA HOUSE というスペースを借りていて、そこで自習したり、ユースインターンの子たちが活動したりしていました。今お話ししたような子たちが、高等学校で何かプログラムがあるよ、何か場を使えるよといったときに、どういう設計だったら来るかなと考えたときに、高校生向けのコワーキングスペースのイメージというのですか、要は自分の部屋や自分の机がある子がすごく少なく家にＷｉ－Ｆｉやｐｃがない場合もあるので、勉強する場所や一人の時間を過ごす場所や少しほっとするような場所がなかったりします。では、どこへ行くのといったときに、高校生たちはコンビニのフリースペースなどでたむろしていますよね。あとはマクドナルド、お金があるときはファミリーレストランなどにいるのですけれども、要は、フリーでＷｉ－Ｆｉがあって、少し食事もできて落ち着ける場所。スターバックスは結構お金があるときに行くみたいな感じですが、そういうのが土・日でも使えると、高等学校はふだんから行っているところですし、行きやすいのかなと思いました。もちろん教室なので勉強はしやすいですしね。でも、おしゃれな感じに、ユースワーカーなどに入ってもらって場を少し作り替えられるといいと思います。それも、ただ子供たちだけではなくて、１人ユースコーディネーターみたいな人がいて場を開放する。教室Ａはスタディスペースみたいなところがあって、そこに来るとふらふら勉強ができるところがあるといいなと思ったのです。

②の学びの提供で、日本語・母語、文化などと書いていましたが、高校生や中退した子たち、若者世代が日本語を学ぶ場。日本語学校ではなくて学ぶ場は意外に少ないのです。特に中退してしまった子は本当に居場所がないので、そういった子たちが日本語を学べる場として、特に中退してしまったけれども、母校であれば行きやすかったりするのであれば、フォローアッププログラムとして、例えば教室Ｂでは日本語クラスをやっているなど。

あとは、先ほど少しお話ししましたけれども、日本生まれの子たちや幼少期に来た子たちが母語や母文化を学ぶ場はなかなかない。例えばそういったところで保護者が先生役をやる。言葉ができる方から日曜学校みたいな形で母語を学んだり、家庭科室などをつくれるのだったら今日は何か料理を作ったりする。言葉や文化の力を身に付けるような学びのものがあったりすると、スタディスペースへ定期的に来ている子たち、会話している子たちを、「今日は家庭科室でこんな料理を作るみたいよ」という感じでそちらのほうへ誘導していって関わりを深めていく。そういう流れがつくれないかと思いました。

③ですけれども、ここはまさしく高等学校と当事者と実施者のニーズが合致するのではないかと思っているところです。先ほど在留資格の話が外国人の子たちの進路に特有なものとしてあると言いましたが、学校の先生でなくて、ここは弁護士さんや行政書士さんでないと対応できない。進路について具体的な相談ができる大人が身近になかなかいないので、今は学校を借りてガイダンスをやっていたりしますけれども、公民館などでやっている相談会や進路ガイダンスを学校の中でできないか。少し関係性が深まっていく中で、「今度こういう進路ガイダンスがあるけれども行ってみたら」という感じで、例えば日本語教室に通っている若者をこちらに促したりというような流れをつくれると、一つセーフティネットといいますか、一旦高等学校から中退してしまった子や、高校生自身もなかなか相談できるところがないので、そういったところが土・日につくれればというのが③ですね。

場の提供と学びの提供と相談機能の提供があるかなと思いました。

最後に、そういったところをつくっていくに当たって仕掛けも必要なのかなと思いました。これまで皆さんの議論にも出ていましたが、高校生や若者がこういった企画や場の運営に参加できるような仕組み、Youth Council と書かせていただきましたが、要は当事者が企画や意見を出しながらつくり上げていくようなものができたりしないかと思ったのです。具体的にこんなことができたらいいなと思ったのは、例えば誰が施設を開放するのかといったところ、その鍵、セキュリティの問題になってしまうので高校生や若者がやるのは難しいかもしれないですけれども、アルバイト代ではないですが、中退した子だったらできるのですかね。若者などがそれこそ一ボランティアや一スタッフ、人材として登録して、少し謝金ももらいながらこういった活動にも参加できる。やはりみんなほぼ日々アルバイト三昧なので、コンビニエンスストア、スーパーでももちろんいいのですけれども、もう少し社会参加も伴ったり学びやスキルラーニングも伴った形で企画運営に参加できる

といいのではないかと思いました。

二つ目は、保護者の参加として、保護者は先生として、先ほどお話ししたような母文化や母語の先生ができると、ただ支援されるだけでなくて、活躍する場を通じてエンパワーメントにつながったりするといいのかなと思った次第です。

ここまでできたらいいなといったところの稚拙な図で申し訳ないですけれども、私、日本の学校ですごく面白いと思うのは、地震のときにみんな逃げるじゃないですか。ハード面でのセーフティネットの防災機能があるので、これは前にも発言したことと重なってしまうのですけれども、ソフト面でのインフラ、セーフティネットとして日本社会の中で学校という存在はすごく大きいと思います。そういったところの開発に、今回そこまでつながるかどうか分かりませんが、ほかのキリスト教の国などは教会に行っていろいろ相談する。キリスト教もいろいろありますけれども、教会が持っているような機能、そういうところが日本にはないので、あそこに行けば相談できる、いろいろ情報を得られるみたいなものが学校になるとアウトリーチしやすいのかなと思いました。

すみません。少し長くなってしまいましたが、私からは以上です。ありがとうございました。

【笹井会長】　どうもありがとうございました。

ここで皆さんから御質問なり御意見なり伺いたいと思うのですが、澤岡委員が途中で退席されるということですので、一番初めにお願いできればと思います。

【澤岡委員】　ありがとうございます。ソフト面でのインフラ・セーフティネットの開発と伺っていて、外国籍で課題を抱えている子供たちだけではなくて、本当にいろいろな地域の中のハブとなる発想だと思って、改めてすごくすてきだなと思って伺わせていただきました。

意見やそういう話では全然ないのですけれども、シニアの話が即頭の中に思い浮かんでしまうのですが、最近シニアの中でもアプリで、日本のことを学びたい外国の学生さんたちに、ある意味ボランタリーな感じで日本語を教えたり日本の文化を教えることがシニアの中ですごくはやっています。そういう関わりでこの中のシニアにもそういう役割が一つ果たせると、もしかしたらシニアに関してもある意味でエンパワーメントで、自分もまだ役に立てるのだと。更に言えば、日本の高校生だと少しむっとしてしまうことも、少し言い方は悪いですけれども、外国の方だとシニアも「まあそうだよね」というところで、もしかしたらすごくいいコンビになるのかなと勝手に一人で頭の中で、ここにシニアが入っ

たらもっともっとすてきかもと思ってしまいました。

【笹井会長】　今の点については、海老原委員はいかがですか。

【海老原委員】　スマホ教室なども行かれるような世代ですか。

【澤岡委員】　シニアですか。そうですね。最近はコロナをきっかけに割と使うシニアも増えていたりします。

【海老原委員】　またバイトの話になって恐縮ですけれども、いかにいいバイトをという課題意識としてあるので、スマホ教室で、あの子たちはスマホが使えるので、ＬＩＮＥの使い方をシニアに教える。しかもそれを日本語でやると日本語の勉強にもなるかなと思いました。

【澤岡委員】　双方にとって良いギブ・アンド・テイクというか、良い力のやり取りになったりしたらいいですね。７０代を境に、ずっと日常生活でスマホを使っていた人たちと、それ以上の人たちは、少し習いたい、それもゆっくり習いたい。ドコモのお店へ行くと早口で全部言われて分からなくて帰ってきて、怖くなってしまったという話もあって、逆に丁寧に丁寧に分かる日本語で一生懸命教えてくださる若者がいたら、もしかしたらそれはすごく良い組合せになるのかなと。

【笹井会長】　ほかにどうでしょう。皆さん、もし御質問、御意見があれば是非御発言いただきたいと思いますが、いかがですか。

【志々田副会長】　コワーキングスペースとして学校の一部を使えるようにする。居心地のいい空間を学校の中につくろうというお話だと思うのですけれども、高等学校を中退した子が高等学校に行きたがるかなと単純に思ったり、学校は結構圧力が強いというか、日本の社会の中で生きにくいと思っている子たちがあんなザ・制度みたいな――私は学校に少し偏見があるのですけれども、公立施設みたいなところに本当に来てくれるのかなと思ったのですが、その辺りの抵抗は子供たちを見ていて感じられますか。

【海老原委員】　私もこれを作りながら同じことを実は思いました。なので、そこも何か少し仕掛けは必要だと思っていて、二つあると思います。心理的に抵抗がある子と、納得して中退せざるを得なかった子とあると思うのです。納得して中退せざるを得なかった子に関しては高校学校に行くことがむしろつながりになると思うのですけれども、前者ですよね。実は私もあまり学校になじめなかったたちなので、職員室などに行くと冷や汗をだらだらかいてしまって、学校に行くと背筋がぞくぞくとします。これは難しいところではあると思うのですけれども、土・日なら行けるところがもしつくれれば、どこかでつな

がるような、一つの選択肢として存在するところになれるといいのかな。

でも、外見的、ビジュアル的な話になって申し訳ないのですけれども、あの殺風景な感じを何か少し変えたほうがいいと思います。それこそ竹田委員が言っていたようなユースワーカーなどに来てもらって、ポップアップユースセンターみたいな感じで楽しく。

【志々田副会長】　お聞きしていて、広島で不登校教室を、スペシャルサポートルームといって学校の空き教室を不登校の子たちのためのスペースにするときに一番最初にやったのは、学校の施設らしくないようにする。ソファーを置いてみる、天井の蛍光灯を布で覆ってみることをして、いかに脱学校化するか。でも、不登校の子たちにも学校に来ることにある程度の意味があるという話をしていて、今言っていた心理的な何かがのけると、本来の教育の場である学校というところの機能を最大限に発揮した支援ができるのかなと今日お聞きしていて思いました。ありがとうございました。

【横田委員】　松山委員のお話を聞いていて全く同じようなことを思っていたのですけれども、スウェーデンのユースセンターなどに行くと、学校でないところにあえてというか、学校から機能を切り離すことが大事という話もあったので、そういった場所の良さもあるし、デメリットという両方の面があると思いました。

お話しされていた中で、外国籍のルーツの方を主な対象として、その子たちが集まれる場所、学べる場所。そういう方々にフォーカスする面と、世代間であったり、外国籍のルーツではない方たちが一緒に学べる、一緒にいられる場所と、どちらをフォーカスしてデザインするのかで目的やそういったものが大分違うと思いました。当事者や若者が企画や意見を出せるような場、彼らが活躍できる場にするというのはすごくいいなと思ったのと、海外のユースセンターなどですと、若者があえて運営に携わるケースも非常に多くあるので、そういったことは機能するのではないかと思いました。

【笹井会長】　今の御意見について、海老原委員、何か。

【海老原委員】　そうなんですよね。改めて高校生が集まれる場所があるか。ユースセンターなど日本もありますけれども、それこそスウェーデンやあちらのほうのユースセンターというのはまだまだないですよね。

【横田委員】　日本にはほとんどなくて、スウェーデンなどでは行政の補助金で運営しているけれども、そういったオープンのスペースで、教えるという目的ではなくて、余暇を楽しむ。何も目的がない人がふらっと来て、何も管理されずに、好きなときにいられるみたいな場所は日本ではあまりない。若い世代しか入れない場所みたいなところはほとん

どないのではないかと思います。

【海老原委員】　　改めて本当にそうだなと思いましたし、場に、ただ来て、無法地帯だと機能しないというお話も、やはり人が必要です。コーディネーターやファシリテーター、管理者ではないのですけれども、場を回してつくる人。こういうのをやっていくに当たっても改めて必要なので、そこをどうするのかというのは私も答えがないです。でも、役割としては必要だと思います。

【笹井会長】　　ユースの話が出ましたけれども、竹田委員は何か。

【竹田委員】　　ありがとうございます。私が発表させていただいた出張ユースセンターみたいなものとすごく重なりがあると感じていまして、すごく共感する話の内容ではありました。その上で、今回の枠組みを考えていく上で私も同じ問いを持ったのですけれども、要は、いろいろなＮＰＯなどがやっているような校内居場所、校内カフェみたいなものをつくる、校内向けの出張事業をつくる。そういうものができるようにするという提案にもつながると思ったのですが、特に今回の外国籍の子たちをサポートする。例えば海老原委員の団体がこういう事業をやろうと思ったときに、こういう理由で今学校が使えないから、ここを変えるとそれができるようになる。今思い描いたものを実現するのに、何か仕組みとしてだったり制度として変わるとできると思われたことがもしあればお聞きしてみたいと思いました。

【海老原委員】　　それこそ福本委員がおっしゃっていた施設開放という枠をどう捉えるかといったところで、私もそこの難しさをすごく感じながらこれを作っていたのですが、まさしく聞かれた、ここがあれば参加しやすいというのが施設開放からかなり離れてしまうのですけれども、活動支援金みたいなものがユースたちに少し入る。スカラシップなのか。生活がかかったアルバイトをしているので、そちらを休んでこちらへ来てねと言いづらいです。だけれども、アルバイトでどんどんすり減っていく状況も見ているので、質的なのか少しでも働きながら学べる場がつくれたらと思います。ただ、そういった制度が今回のものとは少しかけ離れてしまうかなとも思うのでも、常に葛藤があります。

【竹田委員】　　場所がより使いやすくなるというのは最初に必要だけれども、場所があるだけだとできないという感覚、こういう理想は実現できないかなという感覚もおありということですかね。

【海老原委員】　　そうですね。何かやはり仕掛け、仕組みは必要だなとは思います。

【竹田委員】　　私もよく、ユースワーカー的な人が配置できるようにならなければいけ

なくて、それが今ＮＰＯの予算源だけでやるのはなかなか難しいからこそ、その枠組みによりますけれども、この枠組みの中でその予算が獲得できたりするとこういったものもできるのだろうと思いました。

あとは、教室をきれいにすることが改めて大事というか、そういうものをインセンティブに学校が入れたいと思ってもらえたら最高だなとお聞きしながら思いました。

もう一つだけ、聞きながらジャストアイデアとして思ったのが、働きながら場所をつくるところで、私が今とある私立高等学校で、ＯＢ、ＯＧがバイト的に母校の生徒をサポートする事業をやっています。最低賃金で、１教室の場所を与えられて、それをＯＢ、ＯＧで運用しましょうと言われていて、それを私がコーディネーターとしてサポートすることをやっています。それは本当にバイトとして、そのＯＢ、ＯＧが１０人ぐらいでチームをつくって、毎日のようにそこにいて帰宅生徒をサポートする、そういった子たちにイベントを開くことをやっているのですね。これも枠組みと違うかもしれないですけれども、外国籍の子供たちのＯＢ、ＯＧがバイトで母校の生徒に関わることができると面白いのになと思いました。蛇足的ですが、ありがとうございます。

【福本委員】　　私は、高校生向けのコワーキングスペースというのはすごく大事にしたいと思ったのです。だからこそ学校と思うのですね。当事者のニーズ云々というところのベン図があったと思うのですけれども、ニーズだけではなくて、ニーズと今シーズという言葉を使うと思います。外国籍の子供たちのニーズに応えること以上に、彼らのシーズが何なのか。要は提供できるものが何なのかというところを逆にクローズアップしたらどうかなと思いました。それが賃金という形になるかどうか私は分からないので、そこは外させていただいておくとしても、彼らのシーズという観点と高校生向けコワーキングスペースというのを掛け合わせてみると、高等学校という場を使うのは、私はすごく良い場ではないかと思ったのですね。そこに一般の高校生、その学校の高校生、ユースというところで入ってもいいと思いますし、先ほどの高齢者が入ってもいいと思いますけれども、外国人の高校生たちが学ぶ場というよりは、彼らのスキルをどんどん活用する場というふうなシーズというところにクローズアップするとまた少し違う展開が見えるかなと思いました。

先ほど２段階のお話があったと思うのです。今回の場合も、場として彼らが学ぶ場というのもいいと思うのですけれども、それを更に次のステップとして、今度はそこで学んだものを生かすというので、私が大事にしたいのは高校生向けコワーキングスペースで、高校生たちがお互いにそれをうまく、ニーズとシーズを高校生たちが核になって場づくりを

して、それをサポートしていく。更に、先ほどの高齢者のところもそうだったのですけれども、ここでもそういう学びの発表の場というか、生かす場というところも視野に入れて施設開放を考えたらどうかなとは思いました。先ほどのベン図のニーズというところが少しもったいないかなと思って、ここにニーズとシーズと入れるとまた幅が広がると思いました。ありがとうございました。

【笹井会長】　今の御意見についていかがですか。

【海老原委員】　ニーズとシーズと描いていました。

【笹井会長】　ニーズとシーズをセットにすると当事者意識がすごく強くなるのですよね。それはすごく良いことだなと思って話を聞いていましたけれども、ほかの皆さん、どうでしょう。

【松山委員】　考え方として、先ほどの段階的な場の提供から学び、つながりと。そういう考え方を、福本委員がおっしゃっていましたけれども、カウンシルやコワーキングでというのはすごく良いし、段階を踏んだそういう場になっていくことはすごく良いなと思いつつ、それは外国籍に限らず必要なことではないかと思っています。そういう場として高等学校が活用できることは、外国籍に限らず、そういう場として機能することが本当はすごく必要なのではないかと考えていました。セーフティネットやそういうところですよね。

【竹田委員】　澤岡委員の思ったことと一緒だったと思うのですが、私なりにすごく共感しました。どう共感したかというと、途中の現状の課題で面白いなと思ったのは、友達がいない、相談する相手がいない。私もよく聞くと思っています。母数はどちらが多いか、どちらが大事かという話ではなく、これは本当に普通と言われる高校生もすごく思っていることです。面白いと更に思ったのは、私が関わっている子の相談相手は親か塾の先生です。多くの学校の高校生はバイトは駄目なので、バイトの店長がいなくて、塾の先生です。これも結局どっちもどっちで、塾の先生も大学受験しか教えてくれない。いい大学へ行けと言わなければいけなかったりするので、結局相談できなかったりする。そこは実は本当に近い。構造は似ているのだろうなと。それこそ全体で、ターゲットをどちらにするにしてもすごく共通して重要な課題かなと私も捉えました。

【志々田副会長】　海外の公立学校、イギリスなどはそうだと思います。詳しいわけではないですけれども、学校の中にいっぱい仕事があって、それを地域の人たちが働きに来て回している。だから、それが地域の学校の意味で、雇用を生み出す場としての学校とい

う価値は日本ではあまり思われていないのですよね。出すにしても、アウトソーシングで出している仕事が学校にはたくさんあるのだけれども、実は地元にお金が落ちていなくて、便利などこかに落ちてしまっている。高校生たちやここに関わる外国籍の子供たちが働くことと学ぶこととどちらも必要で、そしてお金を稼ぐことが全部等価値でなければならない状況にあるとするのならば、学校開放や施設開放にかかる経費がそういう当事者の子供たちに落ちていくようなことや、地域がお金を稼ぐ場所として学校をもう少しがりがりと考えるのも面白いかなと思って今日は聞いておりました。

以上、意見です。

【笹井会長】　そろそろこの辺にしたいのですけれども、もしほかに何かございましたら。

【横田委員】　今の議論と直接は関係ないのですが、団体でこの話をしていたときに、当事者の教員であったり、学校側の意見や要望や課題、その辺が見えないというのがあって、どうしても外部の意見なので、直接関わる方の意見を聞く場やアンケートや何かからお聞きすることはできるものでしょうか。そういうものは計画されているのでしょうか。

【主任社会教育主事】　御要望とあれば検討はしますが、もう少し詳しく教えてほしいのです。一番の関心は……。どこかで福本委員から、それを集約して御報告いただこうと私は思っていた部分があるのですが、それを補強する意味でという話だとすると、もう少し詳しく。先生、校長というか、学校の教員の捉え方が知りたいということですか。もう少しかみ砕いて教えてもらっていいですか。

【海老原委員】　実際に休日に学校に行って開けなければいけない先生の立場のような、そこまでではなくてですか。

【主任社会教育主事】　そういうことを考えているのだったら、その枠はやはり取り払わないと、基本的にはベースに働き方改革があるから、土・日の場合は教員でない人がどう管理するかという議論にしなければいけないとは思っているのですね。そうではなくて、貸す、管理している側の学校にとってのメリットや、こういうものをどういうふうに受け止めるかという、ストレートな受け止め方が知りたいという意味ですか。

【横田委員】　そうですね。この制度を変えようとしているわけですけれども、現場側というか、学校のスタンスとしてはどういう方向性に変えてもらいたい、こんな制度があったらいい、今学校開放や公開講座を行っている学校としてはどういうふうになったら継続したい、何が課題なのかといった、要望を把握できたらと思います。

【主任社会教育主事】　　一体、誰を呼ぶか。そういった場合に、どういう教員をチョイスするかというところがまず大きく分かれてしまう部分があります。大概の場合は校舎の設備も整っていないので、こういう話を聞くと、自分たちがやらなければいけないのではないかという受け止め方をするとネガティブな話しか出てこないことが予想されます。なので、そういったものを含みおきながらどういうふうに提案していくか。最後はそこを念頭に置きながらやっていかなければいけないという問題意識があって、そういった意味で、福本委員に、自分の立場は違うのではないかとおっしゃられたことがあったのですけれども、そういう観点からの御指摘を、一通りいろいろ提案を受けた中で、逆から見たときの視点を提示してもらえないかということは考えているのです。学校長を呼んでくると、基本的に現状を見た中での発想しか出てこない部分があるので、逆にそういう視点はどこにあるのかというのを踏まえながら、ＩからＶまで仮にパターンを出しましたけれども、要するに、施設の状況や地域性などを考えたときに、全部がこの形でやらなければいけないということは我々も想定はしていないです。だから、今のところは、まだ福本委員に正式にお願いしていないのにこう言うのは変ですけれども、そんな観点から少し意見を出していただくところから始めたらどうかと。なおかつ、ある程度の成案が出てきたならば、地域性や学校のタイプ、先ほども少し言いましたけれども、これから新しく標榜される形の学校改革のベースに乗っている、そういったものを踏まえて柔軟にというか、バリエーションのある対応をしていく前提で考えていかなければいけないかなと思っています。

また、そういう御要望があるならば、ある程度まとまった時点でぶつけてみる機会を設けるというのはありだと思います。ただ、それに沿って受け止められる人たちを呼んできながら議論しないと、全然あさっての方向を考えている先生を呼んできてという議論になってしまうと、１人や２人をチョイスして呼んでくるのは現実的には少し難しいかなという部分があります。

【笹井会長】　　そんなことで、この審議会の建議というか、提案と、実際のフィージビリティーというか、実現可能性をどう捉えるかという問題だと思うのですね。だから、ある程度受け止め側の立場の御意向も聞かなければいけないのだけれども、我々は、それをある程度前提にしつつも、言いたいことは言わなければいけないというところです。それは上手に後日福本委員のほうで調整して……。

【志々田副会長】　　すごい重大なことを、プレッシャーが……。

【笹井会長】　　すみません。良い知恵を出していただければというふうに思ってはいる

のですけれども。余計なことを言いましたが、是非そういう方向でお願いしたい。フィージビリティーの点でどうなのかという御心配はよく分かりますので、そういうことで、ある意味では、適度な距離感と先ほどありましたように、現場とこの審議会の適度な距離感みたいなのが必要だというのはおっしゃるとおりだと思います。その辺は事務局のほうでもよく考えていただいているので、今後の展開にということでお願いしたいと思います。

【主任社会教育主事】　今まで行政の施策はどちらかというと一律にやっていったほうがいいみたいな考え方を取っていたのですけれども、今後の学校施設開放や学校開放というのは、一律に考えるのではなくて、海老原委員のベン図ではないですが、シーズは分かりませんが、学校のニーズをどうとらまえるかという観点を、最後のアウトプットをしていくときに、どういうふうに捉えながらこの意見を具現化できるのかという形で一応事務局を運営する側の構想としては考えていましたので。

【笹井会長】　そんなことでよろしくお願いしたいと思います。

それでは、そろそろ時間ですので、海老原委員からの御発表と意見交換をこの辺で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

本日も本当に活発に御議論いただきまして、ありがとうございました。次回も委員の皆さんからの御発表等を頂きたいというふうに考えていますので、引き続き御協力をよろしくお願いしたいと思います。

次回の報告者につきましては、現在調整をしているところであります。

それでは、事務局のほうから今後の日程等につきまして御報告をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【生涯学習課長】　笹井会長、ありがとうございました。

次回第７回全体会でございますが、こちらは７月２１日木曜日１８時からの開催となります。会場は都庁第二本庁舎３１階特別会議室２６となります。

事務局からは以上であります。

【笹井会長】　ありがとうございました。

それでは、これで東京都生涯学習審議会第６回全体会を終了させていただきます。皆さん、御協力ありがとうございました。

閉会：午後８時０６分